様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３４３１９
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５２０４２

研究課題名（和文）１９世紀末～２０世紀初頭の東欧ユダヤ文化圏における表象文化の研究

研究課題名（英文）Study of the representation culture in the Eastern Europe Jewish cultural sphere from the end of 19th century to the beginning of 20th century

研究代表者
樋上　千寿（HINOUE, Chitoshi）

京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師

研究者番号：３０６０８７４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　イディッシュ舞踏音楽がカントール音楽（ユダヤ教聖歌）の要素をその精髄として堅持しつつ、東欧の離散地の他の舞踏音楽との融合を繰り返す中で独自性と多国籍性を獲得したのみならず、18世紀にはクラシック音楽との接触からイディッシュ・ロココ調の楽曲を数多く生み出した。このような柔軟性・可塑性を持った特性は19世紀後半に東欧ユダヤ人が美術分野に進出する際にも発揮され、20世紀モダニズム芸術の多様性獲得に少なからぬ貢献をしたと考えられる。イディッシュ文化圏の芸術文化の特性に関する研究が20世紀モダニズム芸術の本質理解に有効であることが本研究から明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：Yiddish dance music had gained its originality and multinational characteristics while it repeated fusion with other dance music around diaspora in the Eastern Europe sticking to the element of Cantor music (sacred songs of Judaism) as its essence. Moreover, lots of Yiddish-rococo repertoire had been composed in the 18th century contacting with classical music. Such characteristics of flexibility and plasticity should have been not a little contributed to the multiplicity of the modernism art in the 20th century by Jewish artists who have advanced to the field of fine art in the 19th century. The production of this research has showed that researching of the characteristics of the Yiddish art and culture is effective to understand the essence of modernism art of the 20th century.

研究分野：芸術学

キーワード：芸術文化　東欧ユダヤ　イディッシュ　クレズマー音楽

１．研究開始当初の背景

東欧ユダヤ文化圏（イディッシュ語文化圏）における表象文化の研究は、研究代表者が研究協力者として関わった科研「近代美術史（学）におけるユダヤ人（研究代表者：圀府寺司）」（基盤研究(B)(1)、平成 10～13 年度）、特任研究員として関わった大阪大学 21 世紀 COE「インターフェイスの人文学」での活動（平成 16～18 年）で、東欧ユダヤ系美術家、音楽家の 20 世紀初頭における西欧での芸術活動について国内外の研究者との情報交換を通じ一定の成果を得てきた。また、科研「20 世紀初頭のイディッシュ語文化圏における表象文化の研究」（奨励研究、平成 21 年度）の研究代表者として、主にロシア出身のユダヤ系美術家シャガールの作品解釈を、①東欧シュテートル文化の伝統②19 世紀末～20 世紀初頭の東欧でのハスカラ（ユダヤ人の西欧化運動）影響下でのロシア・ユダヤ芸術の革新③西欧のモダニズム芸術との関連に着目し研究を進めてきた。特にロシア革命直後のシャガールの大作《ユダヤ劇場壁画》（1920）は、これらのいずれにも深い関わりをもち、かつ美術のみならず音楽、舞踏、文学などシュテートルの表象文化全体の理解を要請するものである。それゆえ平成 14 年頃よりイディッシュ語圏の音楽文化についての情報収集と演奏技術の修得を開始した。我が国でのこの分野の学術的研究は極めて不十分と言わざるを得ず、実際の演奏に接する機会も国内では極めて限られ指導者もいないため、ドイツ・ヴァイマールで開催されているイディッシュ文化に関するワークショップ Yiddish Summer Weimar に平成 17 年より参加し、演奏家や研究者との交流と情報収集に努めてきた。その結果、これらの情報を社会に効率的に発信するための機会を創出し、情報拠点の基盤形成を行う必要性を強く抱くことになった。

２．研究の目的

20 世紀のモダニズム美術やクラシック音楽に多大な影響を与えた 19 世紀末～20 世紀初頭の東欧ユダヤ文化圏（イディッシュ文化圏）の表象文化について、シュテートル（東欧のユダヤ人居住区域）における伝統文化と周辺の外部文化との接触、およびハスカラ（東欧ユダヤ人の西欧化運動）によるユダヤ教文化の内的革新を経て独自の発展を遂げたものとして捉え、その本質を明らかにすることで、20 世紀モダニズム芸術理解への新たな視座の設定を目指す。

３．研究の方法

(1)研究代表者と研究協力者が中心となり、東欧ユダヤ文化圏の表象文化に関する情報交換と共通理解の基盤形成を目的に共同研究会「東欧ユダヤ文化研究会」を各年度 5 回程度開催する。

(2)シュテートル文化および東欧ユダヤ芸術に関する欧文文献の収集と読み込みを進める。

(3)イディッシュ音楽（クレズマー音楽、イディッシュ民謡）に関連する音源・映像資料の収集と分析を行う。

(4)ドイツ・ヴァイマールで毎年開催されているワークショップ Yiddish Summer Weimar に参加し、イディッシュ語文化の歴史的変遷過程について研究者による口頭発表や討論を通じて情報の収集に努める。

(5)海外調査を含めた本研究の成果を発表するための演奏を交えたレクチャー・コンサートを各年度 6 月頃に京都市国際交流会館ホールにて、11 月頃に東京・両国「シアターX（カイ）」にて、一般公開で開催する。

４．研究成果

(1)概要

本研究期間の 3 年間で、各年度夏季にドイツ・ヴァイマールで開催されたイディッシュ音楽に関するワークショップ Yiddish Summer Weimar（以後 YSW）に参加し、主宰者で音楽学者・演奏家のアラン・バーン博士 Dr. Alan Bern、音楽学者でクレズマー演奏家のワルター・ゼフ・フェルドマン教授 Prof. Walter Zev Feldman（ニューヨーク大学アブダビ校）ら数多くの研究者、演奏家と交流し、情報交換した意義は大きかった。また、各年度に研究テーマを設定した YSW において、現在も継承されているクレズマー音楽の重要な源流の一つであるベルーフス・ルーマニアン・オーケストラ Belf's Rumanian Orchestra の 100 年前の録音の研究と分析（(2)で後述）、イディッシュ音楽の成り立ちをルネサンス期まで遡って追究した研究成果（(3)で後述）に直接触れ、また情報交換できた意義は大きい。これらの成果は平成 24 年度と 25 年度の研究代表者主催のレクチャー・コンサートでも演奏を交えて詳しく紹介し、発信することができた。また平成 25 年度と 26 年度には、YSW でイディッシュ音楽の伝統とクラシック音楽との影響関係について実演を交えた深い議論と情報交換が行われた。とりわけ、このワークショップでも演奏を行ったクラッサ・カルテット Kràsa Quartett のルードヴィック・ラントナー Ludovic Lantner らの研究によれば、非ユダヤ系ロシア人作曲家セルゲイ・プロコフィエフ Sergei Sergeevich Prokof'ev (1891-1953) やドミートリイ・ショスタコーヴィチ Dmitrii Dmitrievich Shostakovich(1906-1975) が自作中にイディッシュ音楽の旋律やリズムなどの要素を積極的に採り入れた反面、ハンス・クラッサ Hans Kràsa(1899-1944)、アーウィン・シュルホフ Erwin Schulhoff(1894-1942)、ヴィクトール・ウルマン Victor Ullmann(1898-1944)らユダヤ系作曲家はそのような要素を一切排除したクラシック曲を遺している。このような両者の姿勢の相異は、近現代史におけるユダヤ音楽の本質理解

に重要な一石を投じていると言える。
本研究においては、主に音楽文化の本質理解に重点を置いて進めてきたが、そこからイディッシュ文化を成立させている諸要素を抽出し、他の芸術文化の本質理解に資する成果（後述の(4)など）が得られたことは有益であった。

(2)ベルーフス・ルーマニアン・オーケストラによる録音
～100 年前のクレズマー音楽～
平成 24 年 8 月にドイツ・ヴァイマールで開催された YSW では、ベルーフス・ルーマニアン・オーケストラ Belf's Rumanian Orchestra の演奏にアプローチする短期ワークショップが開催された。フランスの若手グループ、フレイレフス・ブリーデル Freylekhs Brider のアミット・ワイスバーガーAmit Weisberger らメンバー4 名は、ベルーフのオーケストラの録音資料約 60 曲分を詳細に分析し、実際に再現演奏を行ってきた。その中で、特徴的な楽曲を幾つか選び、参加者が当時の演奏手法に基づいて実演する試みが行われた。これらの楽曲には曲構成やテンポをあらかじめ決めずに演奏するという特徴がある。平成 24 年 11 月にシアターXにて開催した本研究成果発表会では、研究代表者も参加したこのワークショップでの成果の一端を紹介した。
ベルーフス・ルーマニアン・オーケストラは、20 世紀のクレズマー演奏家に多大な影響を与えたと言われているが、ベルーフそのひとについては不明な点が多い。おそらくそのグループ名からルーマニアで結成されたと思われるが、知られている曲名から類推すると、その活動範囲はベッサラビア、モルダヴィア、ウクライナなどにも広がっていたと考えられている。グループの編成は、クラリネット、フィドル、セクンド（第 2 フィドル）、ピアノだが、ベルーフがどの楽器を演奏していたのかは不明である。また、少なくとも 3 人のクラリネット奏者が所属していたことが、演奏スタイルの分析から知られている。1911 年から蝋管レコードによる録音を開始し、1914 年までに多数の録音を残した。現在約 100 曲の録音資料が確認されている。
楽曲の構成は単純なものが多く、米大陸に渡って活躍したクレズマー・クラリネットの第一人者、ナフトゥール・ブランドヴァイン Naftule Brandwein のものよりシンプルである。クラリネットとフィドルが旋律を担当し、セクンド（第 2 フィドル）がコードでリズムを刻み、ピアノがベースとコード、リズムを担当するというスタイルである。クラリネットの奏法は、ルーマニアとウクライナで好んで使用されたフルートの奏法を模倣した独特の技法を駆使する。クラリネットとフィドルは、互いに相手の楽器の特徴を模倣し合い、フィドルはベンド（指板上で指をスライドさせて音程を変える奏法）を多用する。
ベルーフのオーケストラの楽曲については、北米での 1970 年代のクレズマー・リバイバル期より重要視され、その影響力も演奏家たちに認識されてきたが、今回のフレイレフス・ブリーデルによるワークショップは欧米においてその演奏と楽曲について集中的に議論された最初の機会であった。クレズマー音楽が一般愛好家も含めて広く普及している欧米では、この音楽の奏法面での特徴をあらためて認識する機会となった。また、研究代表者らによるシアターXでの成果発表は、ベルーフのオーケストラの楽曲と奏法を紹介する国内で最初の機会となった。

(3)ルネサンスからイディッシュ・ロココ・スタイルまで
～クレズマー音楽のスタイル変遷を辿る～
平成 24 年 11 月にシアターXにて開催した本研究成果発表会では、同年夏の YSW で開催されたワークショップ「アシュケナージの音楽」での調査の成果として、ルネサンス期から 18 世紀後半までのクレズマー音楽の演奏スタイルに関する以下の研究を紹介した。
ドイツ系ユダヤ人（アシュケナジーム）のクレズマー音楽は、離散地の民族音楽と融合しながら様々なスタイルを取り込んでいった。今知られている楽曲から元々のユダヤ音楽の要素だけを抽出することは困難であるが、その源泉をルネサンス期の楽曲まで遡る研究が、アヴェリー・ゴスフィールド Avery Gosfield ら演奏家によって進められている。ルネサンス芸術が、15 世紀にフィレンツェで花開き、北方（ドイツ）へと伝播したことは知られているが、その当時、音楽もまた美術とともに北方へと伝播したと考えられる。研究によれば、当時のユダヤ人が享受していた楽曲は、異教徒(キリスト教徒)のそれと殆ど変わらないものであった。両者は、二つの媒介物によって、幅広く文化の交換が行われていたからである。その一つが言語＝イディッシュ語である。当時、東イタリアとドイツは、文物の行き来が盛んで、当地の異教徒とユダヤ人はドイツ語とイディッシュ語（これらは元々同じ言語）での意思疎通をはかっていた。また、研究代表者らが成果発表会で演奏した曲「アモローゾ Amorozo（愛)」は、改宗ユダヤ人で舞踏家だった人物によって作曲されたことが知られている。彼は異教徒とユダヤ教徒の双方に楽曲を提供していたため、曲想にはほとんど違いがなかった。このような楽曲が北方へと伝播し、その後ドイツから東欧の離散地へと伝わっていくことになる。
いっぽう 18 世紀になると、東欧のハザン（ユダヤ教の聖歌歌手）がドイツ・ベルリン、オランダ・アムステルダムへと移動する。彼らの聖歌の旋律はロココ調の楽曲とハシディック（東欧ユダヤ教）の旋律から採用された。ベルリンでは、18 世紀末にアーロン・ベアーAhron Beer がフレイラッハ Freilachs の前段階の舞曲といわれるリードル Ridle を

多く作曲しており、それらは記譜されている。彼の曲にはトルコの宮廷音楽（行進曲）の要素も聴き取れる。アムステルダムでは、19世紀前半にシャローム・フリーデ Schalom Friede がイディッシュ・ロココ調の楽曲を遺している。

ルネサンス期の芸術の北方への伝播、当時の改宗ユダヤ人の果たした役割と彼らの立ち位置、18 世紀のクラシック音楽との接触といった諸問題が、クレズマー音楽のスタイル変遷とその多様性の側面を理解するうえで重要であることが浮き彫りとなった。この分野のアヴェリー・ゴスフィールドらの研究成果は欧米でも最初のものである。

この成果については、平成 25 年 6 月に京都市国際交流会館で開催した成果発表会でも紹介した。

(4)シャガールとイディッシュ音楽～枠組みと精髄～

イディッシュ語の成り立ち

イディッシュ語は中世高地ドイツ語に由来しつつ、ユダヤ教徒のゲットー内への隔離政策により独自の発達を遂げる。中世高地ドイツ語を枠組みとしながらも、彼らの精神的拠り所でありユダヤ教文化の精髄とも言える聖書ヘブライ語に由来する語を豊富に含む。その後、十字軍の東征に伴うユダヤ教徒迫害の難を逃れて東欧地域へと離散したユダヤ人は、彼らの言語に離散地のスラブ語系言語の要素を取り入れていく。このようにして混成言語として独自の発展を遂げた（**図 1**）。

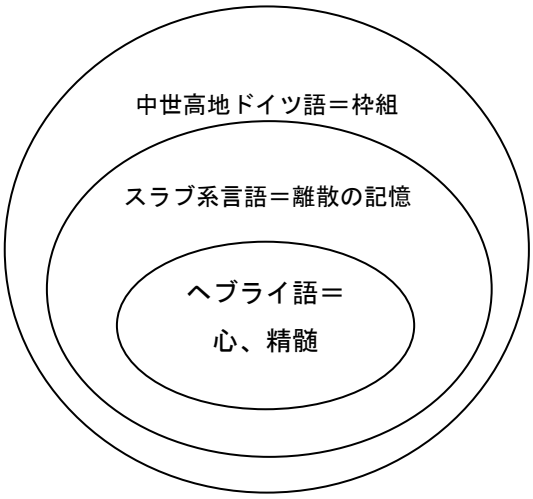

図 1：イディッシュ語の成り立ち

イディッシュ音楽（クレズマー音楽）の成り立ち

イディッシュ語の成り立ちと発達の過程は、イディッシュ音楽の成り立ちと発達を考慮するうえで示唆的である。つまり、ユダヤ教の聖歌であるカントール音楽をその精髄として堅持しつつ、離散地の様々な民族音楽（ロシア系、トルコ系など）の要素や、バロック・ロココの楽曲の旋律的特徴、さらには軍楽隊の編曲や楽器編成などを枠組みとして取り入れつつ発達を遂げる（**図 2**）。「クレズマー Klezmer」とはヘブライ語の「クレイ Kley（容器）」と「ゼメル Zemer（歌）」の合成語であるが、様々な外部文化の枠組みからなる「容器」に、聖なるカントール音楽の要素を「精髄」として吹き込むことで成立していったと考えられる。

Kley- （容器）	**東欧民族音楽 バロック・ロココ音楽 軍楽隊**	**枠組み、容器**
Zemer （歌）	**ユダヤのカントール音楽**	**心、精髄**

図 2：イディッシュ音楽の成り立ち

シャガールの作品

イディッシュ語、イディッシュ音楽を成立させていった「枠組み」と「精髄」の関係性は、シャガール作品の多様性を理解する上で示唆に富む。彼の作品の視覚的源泉は、まず故郷ヴィテプスクで日常的に触れたロシア・イコンの図像であり、さらに世俗的な民衆絵画ルボークのイメージからの借用も見受けられる。これらを造形的基盤に、サンクト・ペテルブルグ、あるいはパリ留学中に吸収した中世キリスト教芸術（チマブーエ、ジョットなど）、レンブラントの作品群、キュビズムやフォーヴィズムの手法をも消化吸収しつつ、その造形的言語に肉付けを施していった。そして、これらの「枠組み」に彼自身の聖書解釈に由来する思想的イメージを吹き込んでいったことにより、彼独自の造形芸術を成り立たせていったと考えられる（**図 3**）。

視覚的イメージ（作品）		心、精髄
中世キリスト教芸術（引用） キュビズム、フォーヴィズム（消化） アカデミズム絵画（超克）	肉付け	聖書解釈（ラシーなど）に由来する思想的イメージ
ロシア・イコン（聖）、 ルボーク（俗）	基盤	

図 3：シャガール作品の成り立ち

左：ルブリョーフ《聖三位一体》（15 世紀初頭）
右：《赤鼻ファルノス》（1760 年代のルボーク）

イコンと《妊婦》（1913）

ロシア・イコンの図像をベースに、彼独特の解釈を施した作例が《妊婦》（1913 年）などのキリスト教絵画の諧謔的作品である。聖母マリアの「処女懐胎」に異議を呈し、両性具有的人物に置き換えることで、キリスト教解釈をユーモラスに批判している。このような「置き換え」の作例は、シャガールの初期作品に特徴的である。

左：神の御母「偉大なパナギア」のイコン、12 世紀初頭
右：シャガール《妊婦》1913 年

《アポリネール礼讃》（1911/12）のアダムとエヴァ

また、彼がユダヤ教小学校ヘデルで触れた聖書の解釈、とりわけ東欧のユダヤ教徒の間で広く受容されてきた中世の聖書解釈者ラシー（ラビ・シュロモ・ベン・イツハキ、12 世紀）による聖書観は、シャガールの思想的イメージに大きな影響を与えた。その例として、《アポリネール礼讃》(1911/12)のアダムとエヴァは両性具有的人物像として描かれている。これは、『創世記』2 章 21～22 節のエヴァの創造に関するラシーの「神はアダムを最初の創造の際に二つの顔を持つものとして創り、その後二つに分割したというミドラッシュの伝統がある。」との注解に基づくイメージである。このイメージがシュテートルのユダヤ人の間で共有されていたことは、ショレム・アレイヘム『牛乳屋テヴィエ』の描写からも窺える。さらに、中世キリスト教絵画でも、Midrash Genesis Rabbah8-1（4～5 世紀）に見られる聖書解釈者の注解「神がアダムを創造された時、神はアダムを両性具有者として創造された」（ラビ・イェレミヤ・ベン・エリエゼル）等、ラシーの注解を導き出した解釈に基づく図像表現が散見される。シャガールの両性具有的アダムとエヴァ像はこれらのイメージから引用された可能性が高い。

左：シャガール《アポリネール礼讃》1911-12 年
右：エヴァの創造　*Parc Abbey Bible*,Belgium, Leuven region, 1148

イディッシュ語―クレズマー音楽―シャガール作品

イディッシュ文化は聖書中心の伝統文化をその精髄としながら離散地の外部文化の形式を枠組みとして借用・応用し、独自の文化を再構成する営みを繰り返してきたと言える。それはイディッシュの言語文化のみならず、舞踏音楽「クレズマー」の成立過程にもこの特質が見られる。このようなイディッシュ文化の成立過程を分析することは、やはり聖書文化をその精髄とし続けながら外的文化から造形的枠組みを取り入れて再構成していったシャガールの作品理解にも有効である。イディッシュ語―クレズマー音楽―シャガール作品を一連のものとして理解するには、その「精髄」の本質的理解が何より不可欠なのである。

本成果については、平成 25 年 6 月に京都市国際交流会館で主催したレクチャー・コンサートで発表した。

(5)今後の展望

上記の研究成果を含め、各年度 2～3 回行った一般向けの研究発表会（レクチャー・コンサート）や、美術館主催の「シャガール展」関連事業等（計 8 回）で実演を交えてイディッシュ舞踏音楽を紹介し、広く理解を共有できたことは意義深い（５．〔その他〕参照）。

欧米でのイディッシュ音楽研究は、演奏家によるものが中心となっている。2000 年から開催されてきた YSW はそのような研究成果が集積され、共有される国際的な学術交流の場となっているが、単なる音楽指導の場ではなく、その音楽文化を育んだ環境全体を含んだ表象文化としてのイディッシュ文化を追究し、共有することに高い水準で成果を残してきている。

一方、我が国では、約 20 年前からイディッシュ音楽の演奏はある程度試みられてはいるものの、恣意的な解釈による表面的な把握に

留まっており、演奏家による本質的研究は未開拓であると言わざるを得ない。近年インターネットでの音楽配信の普及により、国内でも多様な音楽に触れる機会が急激に増えたことに伴い、演奏家側からイディッシュ音楽に関する情報を求める動きも加速してきた。そのため社会への発信者である演奏家間で成果と情報を共有し、イディッシュ音楽の本質的理解を進め、より広範に社会へ還元する機会を設ける必要があるだろう。

このような現状を踏まえて、平成 27 年度より開始の科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究 C）「モダニズム期のイディッシュ文化圏における表象文化の研究」（研究代表者：樋上千寿）において、イディッシュ舞踏音楽の分野に重点を置きつつ、海外調査とアラン・バーン博士ら海外演奏家を招聘してのワークショップ開催などを通してさらに研究を進めていく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
樋上千寿、シャガール作《アポリネール礼讃》の両性具有像について、査読無、立命館言語文化研究 25 巻 4 号、2014 年、3－9 頁

〔学会発表〕（計 1 件）
樋上千寿、シャガール作《アポリネール礼讃》の両性具有像について、立命館大学国際言語文化研究所、2012 年度研究所重点研究プロジェクト「カタストロフィと正義」、2013 年 3 月 24 日、立命館大学衣笠キャンパス末川記念会館（京都市）

〔その他〕
(1)ホームページ等
オルケステル・ドレイデル（研究代表者が主宰するイディッシュ音楽演奏・研究グループのホームページ）
http://www.geocities.jp/smile_dreydel/

(2)招待講演および演奏
①シアターX（カイ）「第 11 回 シアターX 国際舞台芸術祭 2014・クロージング・ガラ・パフォーマンス」、「むかしむかしのお話」、平成 26 年 7 月 6 日、シアターX（東京・両国）、参加者約 200 名
②静岡市美術館「シャガール展」関連イベント「シャガールが愛した、故郷の旋律」、平成 26 年 1 月 29 日、静岡市美術館多目的ホール、参加者約 180 名
③静岡市文化振興財団「Hot ひといきコンサート」、平成 26 年 1 月 29 日、静岡市役所静岡庁舎新館 1 階ラウンジ、参加者約 200 名
④同志社大学グローバル地域文化学部主催「東欧ユダヤ音楽・クレズマーの夕べ：シュテットルから世界へ」、平成 25 年 12 月 11 日、同志社礼拝堂、参加者約 100 名
⑤岩手県立美術館「シャガール版画展」関連イベント「シャガールが愛した、故郷の旋律」、平成 25 年 4 月 30 日、岩手県立美術館 1 階ロビー、参加者約 200 名
⑥京都文化博物館「シャガール展・愛の物語」関連イベント「シャガールが愛した、故郷の旋律」、平成 24 年 10 月 14 日、京都文化博物館別館ホール、参加者約 250 名
⑦岐阜県美術館「シャガール展」関連イベント「シャガールが愛した、故郷の旋律」、平成 24 年 9 月 21、22 日、岐阜県美術館 1 階多目的ホール、参加者約 600 名
⑧岡山県立美術館「シャガール展」関連イベント「シャガールが愛した、故郷の旋律」、平成 24 年 7 月 22 日、岡山県立美術館講堂、参加者約 150 名

(3)研究代表者主催による研究発表会（レクチャー・コンサート）
①「東欧ユダヤ音楽・クレズマー演奏会：シャガールが愛した、故郷の旋律 vol.8」、平成 26 年 11 月 13 日、シアターX（東京・両国）、参加者約 90 名
②「東欧ユダヤの、こころの調べ」、平成 26 年 10 月 18 日、ナムホール（京都市左京区）、参加者約 50 名
③「東欧ユダヤ音楽・クレズマー演奏会：シャガールが愛した、故郷の旋律 vol.8」、平成 26 年 6 月 8 日、京都市国際交流会館イベントホール、参加者約 90 名
④「東欧ユダヤ音楽・クレズマー演奏会：シャガールが愛した、故郷の旋律 vol.7」、平成 25 年 11 月 16 日、シアターX（東京・両国）、参加者約 90 名
⑤「ユダヤ音楽の宴～セファルディの心、アシュケナージの魂～」、平成 25 年 10 月 27 日、ナムホール（京都市左京区）、参加者約 50 名
⑥「東欧ユダヤ音楽・クレズマー演奏会：シャガールが愛した故郷の旋律 3rd.Stage, Part I」、平成 25 年 6 月 15 日、京都市国際交流会館イベントホール、参加者約 90 名
⑦「東欧ユダヤ音楽・クレズマー演奏会：シャガールが愛した故郷の旋律 2nd.Stage, PartⅢ」、平成 24 年 11 月 17 日、シアターX（東京・両国）、参加者約 90 名
⑧「東欧ユダヤ音楽・クレズマー演奏会：シャガールが愛した故郷の旋律 2nd.Stage, PartⅢ」、平成 24 年 6 月 16 日、京都市国際交流会館イベントホール、参加者約 90 名

６．研究組織
(1)研究代表者
樋上　千寿（HINOUE, Chitoshi）
京都造形芸術大学芸術学部非常勤講師
研究者番号：30608740